

世界の中心で笑ったバケモノ

強烈ミントのキセル

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

※タイトル変えました

「学校でタバコはダメなのですよ!!!」「タバコじゃねえ……パイポだ……」

「歩きタバコはダメなのですよ!!!」「タバコじゃねえ……パイポだ……」

「禁煙席でタバコはダメなのですよ!!!」「タバコじゃねえ……パイポだ……」

「図書館でタバコは「何故未成年タバコについて注意しない!?」……へ!?!」

老け顔男子生徒と、幼顔女性教師……これはツイてない老け顔（平均で二十五歳に見えるらしい）が不幸少年と共に暗躍（？）する話である。

目次

最高の1ヶ月

2850円の出費 | 1

不幸とツいてないが交差した | 11

残念ながらレベルは0 | 21

SCP-012-X | 恐怖の羽ペン

| 32

ポケットの中のビスケット | 42

原作開始 科学と魔術と狩人

教会の図書館と三重スパイ | 54

聖母の抱擁 | 65

エンゲージ……結婚式場の飯は旨い

78

最高の1ヶ月

2850円の出費

この物語の舞台は日本の東京……ではなく少し離れた人口の約八割が学生で構成された人工島……学園都市である。

表向きには大分近代的な街並み……科学が進んだ憧れの大都市。

俺としてはあちらこちらに設置された風車と、俺を監視する気分悪い統括理事長の視線が蔓延る気分悪い場所なんだがねえ……吸ってないとやってらんねえわ。

「あ、こらく!!!未成年がタバ……」タバコじゃねつつくの……変わんねえなあ……センチは……はわわ!」

事の始まりは二週間前の深夜……一仕事終えてマイアミのアジトでのんびりしていたら自作PCに忌々しいアイツ、統括バカからメールが入った訳だ。

何の仕事かは詮索しなくてももらえるありがたい……さてそれはそれで話は置いていて……

簡素なメール……内容は　〃来い〃　の二字……思わずどこのマダオだよって

突っ込みそうになったが、俺は基本ボケ担当なので抑えて、こうして学園都市まで来た。

何で入れたのかと言うと……それはあれだ、企業秘密つてやつだ。で、指定された広場に来てみればこの珍妙なコンビの再会である。

片や超絶痩せ型老け顔ノッポ……片や超絶幼児体型幼顔ちびっこ……ナンダコレハ。で、センセイは何故ここに？」

ちなみにこのちびっこ……俺が2ヶ月程世話になった高校の教師である。つまりだ……俺よりも歳食つてる。

にも関わらずだ……あちらは幼顔なのに俺は老け顔。どうも納得いかない。どうこう言っても何もならないとはわかつているが……悔しいものである。

「転校生が来るので待ち合わせしなさいと……つまりお仕事なのです！」と、とてつもなく自信満々なドヤ顔を見せるアホなセンセイ……

「はれ？でも何で橘チャンが？」
「へへ……そりや俺だ」

「だ、か、ら、なあ………転校生は、俺です、はい」
流れる沈黙……

まあ……ボケとしては良い具合の感覚なんだがね。
さて……センセイはどう来るか？

「た、たち……橘チャンがてて、転校生!？」

「そう、俺が転校生……センセイ反応薄いねえ……」

「ここはこう……お前なのかよ!!!……みたいなの？」

そんな動揺リアクションは欲しくなかった……うん、まあ……ノーリアクションよりはマシだけどさ……。

さて、こうして全米が泣いた感動(笑)の再会を果たした俺と小萌センセイ二十歳……から先は教えてもらえなかった……は、とりあえず立ち話もアレだという話の流れで喫茶店まで移動している。

「センセイはあれ、勤務中じゃあなかったのか?」

「え、えつと……何の話ですか?」

「オイ……」

どうやらこのアホ……は見栄を張っていたらしい。

いや、別に悪い話ではないのだが……なあ?

別に俺に見栄を張ることもないだろうに……

「気にしちやダメなのです!」

「お〜……おk?」

まあ……良いでしょうよ……

4 2850円の出費

「橘ちゃんは確か諸事情で……えつと……「ハワイ」そう！ハワイに行ったんでしたっけ？」

「まあ……戻ってきた訳だけどねえ……ん？」

ふと視線を感じ横を見てみればウェイターが……何だ？注文はさつきしたばかり……

「あの、お客様……店内禁煙ですのおタバコは……」

「お前もか!?タバコじゃねえ!!!パイポだっつ!!!」

タバコとパイポじゃ形状が明らかに違うし煙も出ない……全然違う。

それにコイツは接種するのはニコチンじゃなくてハツカ、つまりメントである。

ココだと妙に勘違いする奴が多い……センセイと会う前だつて非番だつたらしいジャツジメントに歩きタバコはダメだとかなんだとかで注意されたし……

「ま、まあまあ橘ちゃん……」

しかも不思議なことに未成年だからタバコはダメだと注意されることは一度もない。

おかしいよなこれは……

「お前さんだつて……幼稚園児が一人で夜道を歩いて良いのか……とか、言われたらシヨックだろ？」

「それは……そうですけど……」

「慣れちやいけない流れつてのもあるんだ……わかるよな？」

「確かに慣れちやつてる節もあるかもしれない……」

「お前あれだべ？もうあの時みたいにタイミング良く助けてくれる奴なんていないからな？」

あの時つてのは、俺と小萌センセイのファーストコンタクト……ついでに俺が初めて紳士じゃないロリコンつてやつに遭遇した時だ。

んじゃ、回想……

【回想】

「路地裏は良いな……タバコ注意されないからな……うんうん……」

「や、やめてください!!」

「ふひひつ可愛いね……」

「うわあ……これはヒドイ……ついてねえ……」

路地裏でパイポを吸つてた時の事である……

まあ、つまるところ……ココ（学園都市）にやつて来たばかりでタバコ注意されるのに疲れた俺は路地裏に……で、嫌アアアな場面にTHE遭遇した訳である。

俺の目の前にはこの時も未来も変わらさずちびつこの小萌センセイと、

「グへへ……脱ぎ脱ぎしましうね〜」

まあ、つまりそういう人間だ。

こんな時、アイツなら善意で助けるのだろうか……俺は正義のヒーローではないので、思念のみで助ける事に。

ズバリ、今回は加害者が気持ち悪いから助ける。である。

「おいお前さん……気色悪いからゴーホームな」

問答無用で加害者に貫手をする。

貫手つてのは、まあ……手刀でモノを貫くつて技で……いや、流石にコイツは貫いてねえよ？やろうと思えば貫けるけどさ……ほら、流石にちびつこが見てる前で殺人はさ？

「ゲホオツツツ」

まあ、貫かないにしてもそれなりにダメージは入るわけで……

「ピツポツパツパツ トンピンパラリノプウ……もしもし？ジャツジメント？不審者、ロリコン、強制猥褻、変態、女の敵、ささつと〇〇学区の路地裏に来て回収しろ。尚、貫手で応戦した為負傷している……正当防衛である為犯罪には問われないモノと思われる。以上……俺は被害者を自宅に送り届けるんでそれじゃ……」

まあ、その後センセイをボロアパートに送り届け……

【回想終わり】

「今に至ると……」

「んう？」

「気にするな……そのままケーキ喰って成長しろ……」

小萌センセイケーキ三皿目……

正直このままじゃ縦ではなく横に成長しそうだが……気にしないでおう。まあ……多分横にも成長しないだろうからな。

「あ!!!今、失礼なこと考えましたね？」

「考えてねえし……逆だし」

つまり太らねえだろうなって事……背も伸びねえだろうけど……プフツ

「で、学校はいつからだ？」

「へ？明日からですよ？」

「準備期間ってのはないのかよ……」

「ありませ〜ん！」

なんとというブラックさだ……しかし明日からってことは……

「うわあ……ついてねえ……じゃあもう解散な」

「へ？」

カランツとフォークを皿に落とすセンセイ……おい、周りに迷惑だろ。

「そりやお前……明日からって事は今すぐにでも徹夜で準備しねえと色々と間に合わせえだろ？」

「そ、そうでしたね……うう……」

「ケーキならいつでも食えるっての……会計は俺が負担してやるから。んじやな……」

「3850円……うわ、結構かかったな……」

「ケーキ三個で2850えん……つて高えなおい!？」

「950×3……(税込) おい!？」

「まあ……ポケットマネーで払えない事もないか……2000円札ガガガ……コレクシヨン二枚から払うとか俺最強?」

「お釣り150円……カカオ100%超コレートドリンクが買えるな……ハハツ」
「ついてねえ……」

「不幸だく!!!!」

「俺に似た心の叫びが聞こえた気がする……しかも随分と前に聞いた声が……」

「おわっ!? ガム踏んじまった……!!!」

「嘘だろ……ついてねえ……」

「この男、橘 零は……そう、ついていない。」

不幸とツいてないが交差した

「帰ってきたウルトラマンって作品があるんだけどさ……俺はあれよりセブンののが好きだったな……」

さて、それはそれ……これはこれ。と、いうわけで話を続けよう。

「どうも、橘 零です……ん、てか言わなくてもわかるんじゃないか？」

数カ月前にも俺居たわけだし……ココに。

「確かにそうですけど……そういう問題じゃないのです……橘ちゃん」

「ああ……んと、様式美ってやつ？」

「へ？あ、そうですよ？」

どうやら俺をバカだと思っているらしい……転校生の挨拶は様式美、これ一般常識。これくらいわきまえている。

「じゃあ、続けるぞ……どうも、カミバナのツいてない方です……」

「おい、その自己紹介はないだろ……」

と、立ち上がったのは特徴的なツンツン頭……

何を隠そう……俺が以前この学校に通っていた頃に俺と同じ不運青年として定評が

あり、いつの間にやらカミバナとコンピ結成させられていた相方である。

ちなみにあちらは不幸の上条……俺はついてない橘。

「この場合、この挨拶が最適じゃないか？ほら、青ピもツツチーも頷いてるしさ……」

「橘ンは案外ピユアやからねえ……」

「邪推ってやつがないんだにや〜」

「俺がピユア？邪推？ナイナイ……それはナイ。てか何の話してるんだよ」

そんなこんなで話は進み……俺は再びこの学校の一員となった訳である。

まあ、それなりに気のいい奴等が集まつてる高校なので……それなりに気に入っている。

唐突だが、俺の能力って奴を覚えておこう。

エネルギー……あるだろ？

運動エネルギーでも良いし、反発しちゃうエネルギー、この際熱エネルギーとかでも良い。とりあえずエネルギー的なモノだ。奇跡エネルギーとか、一見無さそうなエネルギーでも良い。

で、そのエネルギーがどうしたのかと言うとだ、俺の能力はそのエネルギー自体を吸収できちやったりする代物で……

例えば誰かが俺を殴るか蹴るかしてきたとしよう……この際能力でも魔術でも……いや、今のは聞かないでおいてくれ。

とにかくだ……そうだな……俺の相方の得意な老若男女平等パンチが飛んできたとする。

アイツは異能を消す能力を持っているだとか言ったが……そんなのは知らん、今まで俺と喧嘩して発動した試しがない。

飛んできたパンチは運動エネルギーな訳で……吸収して相方にターゲット絞って放

出すれば結果相方は空高く吹き飛ぶ訳だ。

あくまでエネルギーを変換して吸収orエネルギーを変換せずにそのまま吸収した
りできるって内容の能力なので、俺も色々ツツコミたい現象も多々あるのだから、あく
までほら、俺はボケ役なので黙っておいた。

例えば……そう、吸収したエネルギーを放出する場合どれくらい放出するか調整でき
ない……とか。

「おい、これ以上の電撃はやめてくれ……マジで大変なことになるから……」
「やめるわけないでしょ!!!」

なので、これ……この状況の場合……結構危なかつたりする。

この場合電気をそのまま吸収しちやつてる感じなので、放出するとかなりヤバい。
そうだな……この都市全体の約四割程度の電化製品がパーになるな。

なら放出しても無害なエネルギーに変換すれば良いと……そう思うだろうがそれが
できないから困っている。

ツツコミどころその1、能力系エネルギーは変換できない……つまり変換できないエ
ネルギーもあるってことだ。

全部変換できりやいいのに……しかしそうはいかない。面倒くさい。

「逃げれば良い……成程……俺を空高く弾けばなんとかなるか？」

必要な材料はひとつ、俺に飛んできていて変換可能なエネルギーだけ。

どう調達するか………おや、あんなところに大きな岩が……持ち上げて足に落とすのはできなさそうだからタツクルするしかないね。

「チエストゥ……アベシツ」

あえて言っておこう。

俺は岩に物凄い勢いで衝突したが、痛くも痒くもない。

アベシツってのはその場のノリで言っただけだ。

まあ、これで必要なエネルギーはゲットできた。

足元に向けて凝縮して放出すれば………？

地面に大穴があき、ついでに俺は空高く舞い上がり………どうなる？

おっと、俺史上最大の凡ミス………どうするよこれ……

「まあ………どうにでもなるさ………」

『レイさ〜ん〜!!!』

「ほらね………」

『いないと思ったらあんな変な女と一緒に……ブツブツ』

「部屋から出るなど言っておいた筈だが？」

『はっ!? そ、それは……変な感じがして……心配だったからでして……め、命令を破っちゃったのは……その……』

「……まあ、助かったから良しとするが」

コイツはタチコマ……そこらにいる掃除ロボと然程変わらないサイズの多脚式戦車である。

基本装備は俺特注のチェーンガン、ヘビペネ（ネイルガン）、レーザー照射マニピュ

レーター……etc…

水陸空オールクリアの拔群性能流石俺々な我が愛機である。

ちなみにA I搭載で喋れる。

プログラムの搭載した覚えはないのだが自己進化までする……おかげで性格(?)に難有り。

そこら辺の掃除ロボならもの数秒で十機程鉄の山にすることができる。

「ほれ、天然オイルだ……」

『い、良いんですか?!』

「ああ、助かったからな……」

『やたく!!!』

そしてコイツは……可愛い。

「まあ……どこぞの警備ロボに負けないようにしてくれや……」

『わ、わかりましたあ??』

クラッキングの腕もそこらの路地裏研究員にや負けねえ、俺仕込み……ウィルス対策もバッチリ……

色々俺仕様の特注でコストがヤバいんで一機しか開発できてないが……まあ、別にこれ以上必要とは思っていない。

ちなみにオイルで動くので天然でなければお財布にも優しい。(合成オイルは勿論、オリーブオイルとか、サラダオイルでもおk)

普通に本当の意味で寝るし、電気羊の夢見るし、寝言まで言いやがる。

人間より人間なんだよな……

「……………そりやお前、考えすぎだ……………コンビニ行くつて言つたら?」

『へ?こ……………コンビニ?』

『コンビニ?』

「お前、返事したろ?」

『あれ?』

タチコマ……………ヤンデ……………レ?……………なのだが……………ヌけているのであまり……………ソレっぽくない。

残念ながらレベルは0

学園都市に来たら、まず能力測定をする。

俺はまだしていかないのだが、高校の行事としてちようど能力測定があったので、俺はついでにしておくことにした。

能力測定は正直俺にはよくわからない内容がたっぷりだが、言われた通りにこなしていれば普通に終わる。

俺の能力からしてレベル4は堅い、そう思うだろうが……残念ながらそうでもない。

『橘ちゃん、レベル0なのです』

「はあ……そうですか……ついてねえ」

色々、まあ、あるんだろう。

『橘ちゃんこればかりは仕方ないのですよ……』

「まあ、脳ミソでカバーすればおk?あと義手でする貫手……」

これは言っていないが俺は両利きで、右手が諸事情により義手だ。

基本俺は両方の手で貫手をするが、右手……つまり義手は伸びる。

なので義手での貫手は掃除ロボだろうが何だろうが簡単に貫通することができる。
さながらロングスピアである。

あ、言っておくが人相手には基本左手なので……まあ、余程の事がなければグロイ事にはならない。

ちなみに俺は貫手しかできない。

「おい、いつでも良いとは言ったがな……流石に日曜日かなあ……」
「休みだから良いのです……」

「そうじゃねえ、ほら、ここに来て初めての休みだから色々あるだろ……」

「そ、そうでしたね……先生は急いで仕事終わらせちゃいましたけど……橘ちゃんにも予定が……」

「いや、まあ……別に良いんだけどさあ……貯金もそれなりに下ろしてきたしさ」

再びケーキ喰いに喫茶店へと来た俺と小萌センセイ……

色々と物品（主にタチコマ関連）を購入する為に少々多目に貯金を下ろしてきたが、四捨五入して10000円のケーキは未恐ろしい。

別にケーキくらい好きなら喰えば良いのだが……

「迷惑でしたよね……」

そう、ブツブツ呟きながらモソモソとケーキ喰うのはやめて欲しい。

喰うならこう……嬉しそうにだな……

「別に迷惑じゃねえって……そう暗い顔すんなって……いや、マジで……」

「でもですね……」

「ほれ、このパフェでも喰つとけ……」

「へ？た、橘ちゃん!？」

店員を呼び出してパフェ（税込み1890円……どうしてこども高いんだ？）を頼んだ。

店員に変な顔をされたが……どういう意味だ？

「橘チャン……えつとですね……私は教師で橘チャンは生徒なんですよ？」

「は？……ん、まあ……言わずもがなそうだが？」

生憎だが俺には何がなんだかサツパリわからん……どうやらこの状況は一般常識にはないようだ。

「お待たせいたしました、当店目玉のラブラブパフェでございます……ごゆっくりどうぞ……」

そう言つて店員はテーブルにパフェを置いた。

しかし名前が気になる……メニューには単なるパフェとしか記載されていなかった気がするし……ラブラブ？何だそれは……

「この店の目玉か……成程旨そうだ……良かったじゃないか、高かったんだからちゃんと喰えよ？」

「へ？」

店内の空気が凍った……何だ？

「俺は……激辛麻婆豆腐（何故喫茶店にこれがあるのかわからんが）でも頼むかな……店

員さん、これください」

「は、はい!!!」

何だろうか……空気が微妙すぎる。

「何だ?………てかおい、喰わねえのかよ」

センセイはパフェを眺めるばかりで一向に食べようとしない。

こういうときにはどうするんだったか……確かタチコマが見ていた育児番組では

……

「ほれ、アーンしな」

「ふえ!?!」

こうやって喰わせるんだったか……

こりゃあ……センセイのちびっこっぷりも合わせて当にそれだな。

………ん?

「どうしたセンセイ……ささつと喰えよ」

「で、でもね? 橘ちゃん……?」

「何だよ……高かったんだからちゃん喰ってもらわねえと大損なんだが……」

そうこうしている内に店員が麻婆豆腐を持ってきた。

真つ赤で旨そうだ……うん。

「うん、旨い……にしても……」

何故この麻婆はこんなにも冷めているんだ？

これはこれで新感覚で旨いが……うん。

その後約5000円と1200円支払い、小萌センチと解散した。

始終顔真つ赤だったが……何だったんだろうか……

さて、それはともかく、今現在重要なのは買い物である。

俺はタチコマにバイクの如く乗り、タチコマはキュルルルツ……と無駄なくスイスイ進んで行く。

確かツツチーの妹だっけか？どうだったか知らんが……アイツの身内に掃除ロボの上に正座してる奴いたようないなかったような……まあ、乗り方は違うがあんな感じだ。

『レイさんとお出掛けくやった〜！』

「おいおい……はしやぎすぎて物にぶつかるなよ？」

『僕はレイさんの愛棒だよ？大丈夫だよ〜』

「まあ……そいつはそうだが……」

今日買うのはタチコマの後付け装備用のパーツ。

つまりこのままでも強いタチコマが更に強くなるって事だ。

『あ、そういえばレイさん』

「ん、どうした？」

『レイさん、午前中何してたんですか？』

「む……まあ、友達と飯喰いにな……」

俺は昼飯を喰ったので、あながち間違いない。

それにセンセイは俺的には先生ってか友達の分類だしな……

『そうですか……』

「おう」

しばらく静かな空気が流れる……微妙な感じだ。

『レイさん……』

「ん？」

『最近僕との時間が減っているような気がするんでスケド……』

「まあ……今回はあんまり大きく動けない仕事だからなあ……」

『昔はそうでもなかったんですけどお……おいてけぼりは寂しいのです……』

「おいおい……お前は俺の相棒だぞ？んなわけないだろ……」

大切だからこうして一緒に出掛けるし、ここじゃなかなか手に入らないポケットマ

ネーに大ダメージの天然オイルだつて購入している。

毎週木曜のワックスは欠かさないし、月1の手作業、肉眼でのメンテナンスも欠かさない。

ホイールの擦り減り具合も毎月確認するし、毎日ウイルスバスタープログラムも俺のできる限りの演算を駆使して強化している。

できうる限りの望みは叶えてやれるようにしているし、絶対に破壊されないように秘密兵器だつて積み込んだ。

だからまあ……本当は3機開発する予定だったのがコイツ1機になつちまつたんだがな。

「今日の出費は……結構使ったな……19万6千円と……仕事しねえとなあ……」

「帰ったら財団から依頼来てねえか確認してくか……」

「次はどんなのかねえ……切り裂きジャックとかか？」

「え〜!? あんな危険なお仕事をまたやるんですか!?!」

『やめておきましょうよ!!!』

『レイさん死んじやいますよ!!!』

「アホ、死ぬわけねえだろ……」

「危なくなったら今まで貯蓄してきたエネルギー放出するべ……」

「消し炭にしたって財団も許してくれるだろ……」

『うう……オールドマンみたいなのはもう嫌だよ……』

『ホイールが全部腐食しちゃって動けなくなつて……うう……』

「ま、危なくなつたら助けるさ……」

「お、依頼来てるな……何々……件の楽譜に関する羽ペン？」
「面白そうじゃねえか……」

SCP財団を御存知だろうか？

彼、橘 零はその手の世界ではSCPハンターとして有名である……

ゼロ タチバナ……彼を知るものはこう言う。

『彼は凶悪なSCPよりも凶悪なモンスターだ……彼の戦いを見たとき、私は彼がSCPなのではないかと疑ったよ』……と。

SCP-012-X 恐怖の羽ペン

『SCP反応！近いよ!!!』

「おう、こりゃ……超強力で凶悪だ……」

『うん……気を抜いたら演算が乱されそうだよ……』

「注意しろく……イザとなったら俺に飛びつけ……」

『へ!?そ、それはあ……』

簡潔に言うところ今現在仕事 중이다。

学校……は、諸事情による休み扱い。

アホの統括理事長には、無理に話を着けておいた……最後まで奴は納得していなかったが、貴様の計画の邪魔をするぞ……と、脅して何とかした。

仕事の内容はSCP-012不吉な曲に関連するSCPで、恐怖の羽ペンという名前らしい。

SCP-012の関連SCPらしいのでどう番号が振り分けられるのかは知らないが、012の後ろにXとでもつくくんじゃないだろうか？

『ぼ、僕みたいな硬い鉄に抱きつかれても……』

「おい、帰つてい……」

さて、そうこうしてやって来たのはSCP—012……面倒だな。題名であるゴルゴダの丘とも呼ぶか。

ゴルゴダの丘が発掘された場所より南東に約二キロ半、現地の住人からは悪魔の寝床と呼ばれるボロ小屋……その地下である。

発見者は……おっと、コイツは「削除済み」とでも言っておくか。

発見者である「削除済み」は地下室に入るのをギリギリ踏み留まり、財団に連絡……俺が依頼を承けてこうしている。

その羽ペンがどういう効果をもたらすかは知らんが……タチコマの話聞く限り、ゴルゴダの丘とそう変わらないのではないだろうか。

「あつちは確か……見たものは楽譜を自分の血で完成させようとし、『完成できない』……そう言つて自殺するんだつたか……」

『うん、でも殆どは自殺する前に出血多量で生命活動を停止してしまうらしいけど……』らしいつてのも、ゴルゴダの丘は俺がこの世界に入る前にSCP財団に回収されたSCPなので、あまりその時の状況は知らないのである。

悲惨だった……つてのは、資料にあるソレの取扱いや、その時の記録を見る限り理解できる。

俺が回収したSCPだって、かなり危険なモノが多いらしく（最近では財団が俺に危険なSCPの回収を依頼しているらしい……）……例えばペスト医師（触ったらメキヨツと殺されてゾンビにされる）やらゾンビ菌（感染したらゾンビになる）やらオールドマン（触ったらそこが腐食するし、喰われる）とかな。

SCPの特殊能力が通用しないのも、俺自身の能力のおかげなのだが……まあ、こればかりは自分の能力を大いに利用するしかないだろう。

一番回収が難しかったのは……SCP……何だったか？とりあえず幼女と、そのすぐ下の水の妖精、後はオールドAIだな。他は力づくでどうとでもなったしそうでもなかった。

特にオールドAIは、俺の演算とタチコマの補助がなかったら厳しかったかもしれない。

ネットワークに逃げているヤツを捕獲しろと財団に依頼されたんだよな。

それと比べれば、パツと見つけてパツと小型シエルターに回収してパツと帰ってパツと財団に後始末を任せればそれで終わる分、かなり楽だ。

『あ、あれだよ!!! って……あれ、シャイボーイ!』

「なぬ?」

確かに羽ペンはあった……しかしタチコマの発言の通り、ヤツがいた……

SCP―………：忘れた（2000以上いるんだぞ?）。シャイボーイ………：己の顔を見た者を問答無用で殺しに掛かるヤベエSCP。

アイツとはかなり因縁深いアレコレがある。

下手に姿形が人間に近いだけあって、ツルツルな皮膚やら骨と皮だけの体とか、異様に長い腕とか、何より常時白目の顔………：はつきり言おう、気色悪い。

ファーストコンタクト、諸々では殺しちまったが、色々あった後に回収した。

顔を見ない様にすれば良いのだが………：そうするとタチコマが危険で危ない。

ヤツはモニター、カメラ越しでも顔を見たら発狂する（2体目でわかったこと）。写真だろうが関係無い（3体目でわかったこと）。絵はギリギリ大丈夫らしい。

タチコマは三つのカメラの他に、小さいのが六つほどある。

無人ロボットでも駄目（つまり破壊されてしまった）だったので（5体目でわかったこと）、タチコマも無論駄目だ。

ついてねえ………

「タチコマ、下がれ………：顔を見ないようにカメラをオフにして、音響センサのみで活動しろ」

『りよ、了解しましたあゝ………』

名前も忘れたが………：何とかの石像だったか？ソイツの対策の為にカメラを取り付け

過ぎたか……

とりあえず……だ、

シャイボーイは放っておいて……羽ペンを回収して、地下への入り口を封印しておけば……大丈夫だろう。

奴

ヤツは顔を見なければ無害だ。

「タチコマア……ギアチェンジしておけ……羽ペン回収後、すぐに離脱するぞ」

『了解しましたあ〜！』

その後どうなったかって？

そうだな……義手を取り替えないとマズいかもしれない……とでも言うておこうか。

「報酬が70……ね。まあ、妥当か……しかし少ない気がするのも妥当である」

まあ、生活費と、友人（主にセンセイだが……）に付き合う費用（奢りやらなんやら）、後は滅多にないが治療費や、後はタチコマの分だ。

「6日はちと休みすぎたか……」

移動に2日と半日、回収に半日、財団と話をつけるのに3日……

俺の能力は別に早く動ける能力って訳でもないのでタチコマで移動したのだが、下手

な航空機よりも安全で早い。

しかしまあ、それでも時間がかかったが……

「あく！橘ちゃん!!!」

「ん、センゲフオオ……ど、どしたの?」

一瞬ピンクが見えたと思ったら腹（鳩尾）に衝撃が……能力の発動がもう少し遅かったらかなり危なかった……かもしれない。

かもしれない……というのも、俺の腹に突っ込んできたのは小萌センセイだから……まあ、そんなに痛くないと、そういう事なんだよね。

「てかどうしたよセンセイ……」

「2日ほどって言ってたのに……心配したのです!!!」

「……………え?あ、ああ……事情が変わってさあ……」

「それならそうと連絡するべきです!!!」

「そう言われても困るんですけど……衛星電話ってバッテリーの消費が激しいんですね……」

タチコマの外付けバッテリー、コレが意外と便利で、色々とお世話になっている。

何度も言うがタチコマはオイルで動いているので、このバッテリーは好きに使える。

まあ、タチコマの武装のひとつである強力スタンガンはバッテリー消費するが。

「心配させたら補習なのです！」

「ん、まあ……休んだ分はよろしく頼まあ……」

スケジュールには余裕がある。

手元（つまるところのポケットマネー）には70あるし……貯金もそれなりにあるし……あれ、なら何で俺は仕事なんぞしたんだ？

あ、そうか……貯金が一定の金額から下回ったから仕事したんだか……そうそう。

で、

「おう、ところでセンセイ」

「何ですか？」

「ほれ、やるべ」

「へ？」

「土産土産……心配させた分はこれで許してくれや」

「橘ちゃんから貰ったこのお土産……」

「何だろ……」

「SCP—2083—X……青い真珠？」

「綺麗な腕輪……装飾は青い真珠だけ……わあ……四個も……」

SCP—2083—X 青い真珠……

SCP—2083 幸福の二枚貝より生成される真珠。

所持者に小さな幸福を与えるとされており、見た目も美しい。

この真珠は74年に一度生成され数もかなり少なく稀少価値が高いので、Cクラスの職員ですら見ることが許されていない（Dクラスまでである）。

橘 零の仕事による報酬が低かった理由、財団との報酬に関する交渉が長引いた理由、それらがこの真珠にあるのかどうかは「削除済み」である……

ポケットの中のビスケット

「財布忘れた……不幸だあ……」

「何だ、上条お前財布忘れたのか……ほれ」

「おの、橘サン？……これは？」

「橘家秘伝の特大おにぎり……名付けて弁当にぎり。気をつけて喰わねえと中身が落ちるぞ〜」

「上やん良かったやん……」

「そうそう、橘ンの弁当にぎりって見た目は巨大おにぎりなのにめっちゃ旨いんだぜい？」

「マジでか？」

「舞夏が作り方教えてくれって言うくらいだにや〜」

「でも教えてやらないんやと……」

「そう簡単に教えたら秘伝にならんだろうに……」

ちなみにこの弁当にぎり……以前体育でへばっていた青ピとツツチーにご馳走した事がある。

この弁当にぎりは普通の山賊むすびや、爆弾むすびとは大きさも具も全く違う。ちなみに喰い方を間違えたら……

「おわっ!?!お!?!」

「あちゃ〜……上やん下手やな〜」

「素人だし仕方ないにや〜……」

と、この様にボロボロと崩れて落ちる。

「とりあえずこれでも敷いて喰えや……」

タチコマ（旧型）の設計図（ビニール製）を上条の机に敷く……ちなみにこの設計図は普段からランチマットとして使っている。

わりと便利だ。

「お……サンキュー……」

「ん？橘ン、これ……何？」

「素人目でも何かの設計図に見えるぜい？」

「ん？ああ、タチコマ……ツッチーは知ってるだろ？あいつの旧型の設計図……いらな
いからランチマットな」

「なんや知つとるんか？」

「……………あ、舞夏の言ってたあれかにや〜？」

「お前ガツツリ見とるだろうが……」

何気にタチコマの存在はあまり知られていない……

「……………んん？」

「知らんのかいな……」

「あゝ……………おう」

『もしもくし……………こちらタチコマだよお〜レイさあ〜ん？』

「うえ!!」

「何や今の可愛らしい声……」

「……………あ、これタチコマちゃんだにや〜」

何をしたのか簡単に言うത്スピーカー設定でタチコマに連絡した……………それだけである。

「おう、ちゃんと留守番できてるか？」

『もつちろくん、あ……………』

「どうした？」

「なんや……………タチコマて人間の女の子やん……………」

「それが違うんだぜい……………」

『お留守番するとお土産という報酬が発生するという話を聞いたのですが……………僕に報酬

は……』

「おう……それもそうか」

「僕っ娘とかレベル高っ!？」

「あんまり夢見ない方が身のためだぜい？」

「土産話なら嫌というほどしてやるが？」

『お土産話？』

「おう」

『やった〜！レイさんとお話だ〜!!!』

「そもそもタチコマは橘んにぞっこんだにや〜……」

「なんか……残念やな……」

「うわ、うまつ……」

「じゃ、おとなしく留守番してろよ〜……」

『はあく〜い!』

そろそろ授業が始まる……

上条はまだ弁当にぎりを喰っているが、まあ……大丈夫だろう。残りの量的に。

「あく〜橘ンまたタバコ」パイポだつてわかつてて言つてるならばつ飛ばす」じよ、冗談だ

にや〜……」

爽やかミントでスツキリ爽快……演算も快活、好調好調……
俺の能力は常時、ほんの少々だが発動している。

少々なので、日光を少々吸収したりできる程度……この状態で殴られれば勿論痛みや衝撃は少々抑えられるものの、痛いし威力によつては吹き飛ばす。

話変わつて昔はかなりの未成年ヘビースモーカーで、色々あつて禁煙することになつて……で、まあ、禁煙パイポ……今吸つてるパイポに出会つてな。

それから吸つてる……以上。

「悲しいかな……禁煙するつもりがパイポ中毒になつてるような気もする……」

「今日でもう十本なのです」

「そう言うがセンセイのがもつとひでえよ……わりとマジで……」

小萌センセイはヘビースモーカー……アダ名までついてるらしい。

「俺みたいに早めにやめとけよ」

俺とセンセイは授業が終わり、センセイは様々な書類を自分のデスクに、俺は職員室に用事がある。

で、センセイに「一緒に行きませんかあゝ？」と、誘われたので一緒に職員室へと向かつているのである。

「橘チャンは未成年ですから……先生は大人なのですよ！」

「へいへいそうですか……早死にしても知らねえぞ？」

すると後ろでパサツと何か紙を落とした様な音がした。

「ん、どしたよセンセ……イ？」

「早……死に……」

書類を落としたセンセイは顔が真っ青で……しかも震えていた。

これは……選択肢ミスったか……フォローしないとマズいかもしれんな……

「お、おいおい……そうは言ってもここは学園都市、科学の都市だぜ？大丈夫大丈夫……」

「そ、そうは言っても……」

「大丈夫だって、死なねえって……」

こりや相当大きな地雷を踏み抜いちまつらたしい……涙目になってやがる……

「ああ、ちよ……まるで俺がイジメたみたいじゃねえかよ……」

そもそも何かがおかしい……なぜだ!?

センセイはそもそも俺よりも学園都市に長くいる訳だし、ここの医療技術の高さについてもよくわかっている筈だ。

だからここまで取り乱す筈ないのだが……

「はい、センセイよく聞いて……復唱……先生は早死にしないのです……はい、」

「先生は……早死に……しないの……です……グスッ」

「はいはい、その調子で……もう一回……はい、」

「先生は……早死に……しない……のです……グスッ」

「センセイは早死にしません、わかりましたね？」

「はい……グスッ」

非常に申し訳ない気分だ……

「それに、何かあっても俺が能力で助けますから……ね？」

俺が獲物を仕留めた（つまり殺した）時……どういふことなのかは知らないがソレに残った生命エネルギーを必ず全て吸収してしまう。

今まで吸収した生命エネルギーは一度も解放したことはないが、それは莫大なモノだろう。

もしかしたら不治の病も治るかもしれない……勿論、肺ガンだろうがね？

「橘……チャン……」

「で、何だよ財団の番犬……」

電話が掛かった……他でもない財団から……その中でも幹部とも言える、財団の番犬からである。

『SCP—048……教会の図書館があるべき場所より逃亡した……捕獲、又は削除を願いたい……』

これを聞いたとき俺は少々自分の耳を疑った……

「ふうん……呪われたSCPナンバー……教会の図書館……ね」

呪われたSCPナンバー……このナンバーをつけられたSCPは何者かによって盗まれたり、破壊されたり、遺失してしまうと言われている。

以前この話を信じなかった博士の指がきれいさっぱりもげてしまったことはその手の世界では有名である。

「生憎だか俺は危険性の高いSCP専門でね……捕獲にしても削除にしてもそのSCP

と対面してから考えさせてもらおうよ」

普通はこんなこと言わないのだが……相手が財団の番犬であることが引つ掛かる。

そもそも財団そのものが胡散臭いモノなのだ……番犬直々に依頼が来るつてのは……ナニかあるのかもしれない。

ついでもうひとつ、引つ掛かるモノがある。

アホの統括野郎からの緊急の連絡だ……

考えすぎなのかもしれないが、タイミングが良すぎる。

番犬からの電話一分前にこちらはメールで連絡がきたのだ。

ナニかあるんじゃないか？

『……………それは依頼を引き受けたと見なして良いのか？』

「さてね……………」

『……………良い結果を期待している』

ブチツと通話が切れた。

何が良い結果だ……胡散臭さが倍増したぞ？

「こりゃ……………ピーカー統括に話聞かねえとな……………」

これは周りが暑い暑いとだれている夏休み前の事……

「話はそれだけか？」

「ああ……承諾してもらえるかな？」

「まあ……良いんじゃないね？」

「上条当麻の影の立役者となる……」

「あ、残念だけど『影』はむりかもしれんな」

「どういふことだい？」

「まあ、聞けや……」

「俺の能力上、影じゃああんまり行動できないんだ……」

「漫画やアニメであるだろう？ちよくちよく体張ってサポートしてくれる親友ポジション……」

「あれくらいなら演じることもできるかな？つて話なんだよこれが……」

「なるほどね……君らしいな」

「俺らしい？」

「冗談はそこそこにしときなよ……」

「お前さんの書いたシナリオに少々、いや？かなり個性的で強力なキャラクターを登場させるだけ……」

「科学でもあり、魔術を知り、SCPのハンター……かなり面白いキャラクターだとは思わないか？」

「しかも『彼女』を捕獲、又は削除するべきか監視していると……成程ね、面白いよ」
「だろ？」

窓がなく、照明もない……しかし室内は真つ暗ではなく薄暗い……

その住人アレイスター……そして客人の橘……

室内に響く不気味な笑い声は二人のモノなのだろう……

原作開始 科学と魔術と狩人

教会の図書館と三重スパイ

突然だが俺の今現在住んでいる寮の一室……その真下は上条の部屋である。

なのであいつが騒いでいると、「ああ……何かあったなこれは」……と、お察しするところがである。

多分だが、あいつが不幸なのは自分の幸運パワーを能力で消してしまってるからなんじゃねえかと、俺は思っている。

ちなみに俺の場合は、以前話した通り常時僅かだが能力が発動しており、自分の幸運エネルギーすらも削り吸収しているのである。

そしてこれもまた生まれてこの方解放したことがないので、神すら凌駕する奇跡も起こせない事もないだろう。

話は逸れたが……ベランダで体操をしつつ一服（つつても本日一本目のパイポってだけだが……）していたら、真下から不幸だのなんだのととんでもなく騒がしく、ああ、こりや何かあったな……と思つた次第でね。

さて、何かあったな……と思つたらまず人間なら野次馬するべきである。

それにだ、置き電話（先日購入したばかりで、対電仕様にしていなかった）が使えなくなっていた事もある。

恐らくだがコイツの約半分は真下の部屋の住人が原因だろう……。

半分、と言うのもだ……俺は俺で対電仕様にする為の部品が【ひとつだけ】足りず、今日部品を買いに行こうと思っていたところなのである。

全くもってついてない……

「チャイムは……ああ、使えないんだったか……仕方ない……ノックしてもしもし……」
扉の向こうでバツタンバツタンと妙な音が少々続き、勢いよく扉が開いた。

「どちら様で……ってなんだ橘か……」

「おいこら……人が折角朝飯持ってきてやったのになんだとはなんだ……」

とは言いつつも、流石に何も喰わせずに学校行かせるつてもアレなので、持ってきた二段弁当（振り回しても中身が出ない優れもの……）を投げつけておいた。

「うえ!! お!! おお!!」

「どうせ朝飯喰えないんだろ……?」

「でも何で上条さんが朝飯食べられない状況にあるつてわかつたんでせうか?」

「対電加工していなかった電化製品がな……粗大ごみになってたんだよ……これでわかるな?」

「う………そこまで被害が……」

さて、この時点で俺は今回の事案について（関係無いのもあるかもしれないが……）色々と理解してきた……まず上条の手に付けられた歯形……これは人間のものです、健康な女性のものと思われる。

服は昨日別れる寸前に喰ったハンバーガー（俺の奢り）のソースが付着している辺り昨日と同じモノだろう。

そして昨日まで綺麗だったものがヨレヨレになっている辺り着たまま寝たんだろう。

まあ、ハンガーに掛けずに足下に投げたなら話は別だが……アイツの性格上それはないだろう。

家計がカツカツだから出費はなるべく抑えておきたいとか言ってたしな……

そして部屋の奥から流れてくる適当に作ったらしい料理の匂い……しかし上条はハッキリと飯を喰ってない、喰いたくても喰えないと言った。

つまりその料理は上条ではないナニかが喰っているのだろう。

玄関先に靴はなく、そして騒ぎの発端がベランダだったということは、ソレは不意の客人（つまり不法侵入者）である事を物語っている。

上条の部屋は少なくとも一階ではないので、その何者かはベランダに登ってきたか落ちてきたのだろう。

そしてこの妙な雰囲気……まあ……簡単に言うとは魔術の方の回し者って感じの雰囲気である。

「ここら辺は俺の経験則だから根拠はない。

ついでに言うなら俺にはもう何が来たのかはだいたいわかる。

「教会の図書館……か」

「ん？何か言ったか？」

「いや……ちよつと部屋上がらせろ」

「え？あ、上条さん今ちよつと込み合ってます……」

「問答無用」

「あ、ちよつ」

人間……しかも女性ときたか……教会の図書館……

確かに噂でも聞いたことがあるにはある……計約五万冊程の禁じられた魔術に関する書籍を記憶した女性が教会にいたりとかいないとか……

問答無用で禁じられた魔術を放ってくるような危険な人物だとも聞いているが……

果たして……

「当麻……もうなくなっちゃったんだよ……」

「っ!？」

「あれ？当麻じゃない？……誰？」

「……………なんだ……………ガキか……………」

正直拍子抜けした……………教会の図書館なんていうから警戒したが……………間抜けそうなが
キじゃねえか……………

それもそうだ……………いくら上条にあの能力があるにしても、俺の部屋のベランダから見
た上条の部屋のベランダに傷はひとつもなかった。

そして噛みつくという物理的な攻撃……………魔術も使えないのだろう……………

「刈る必要性も、削除する必要もなさ気だな……………こりゃ」

「た、橘サン!？」

「おう上条、邪魔したな」

「あ、はい……………て、え!？」

「んじやな〜」

「ちよ、ま……………ウワプツ」

とりあえず顔にメモ書きを叩き付けておいた。

内容としては、『厄介なモノに巻き込まれたな……………何かあつたら呼びな……………教会の図
書館によろしく言っておいてくれ』と、電話番号。

何か知ってる風な書き方をする事により、断じて俺が全くの部外者ではないことを

ほのめかし、上条の他人は巻き込めませんよ的なヒーロー思考をとりあえずどうにかしておいた。

アイツは電話番号からメールアドレス等々は既に知っているので、特に書く必要もないだろう。

でも念のために……だ

玄関に一応メモ書きを貼っておくことにした。

アイツがいつ携帯電話を真つ二つに叩き割っていたり、メモリをフォーマットしていてもおかしくないからな。割りとマジで。

「ほれ、オイルだ」

『わうい！……あつ！いつもの合成オイルとは違いますね〜！』

「ああ、そうだろ」

『でも天然オイルとは違いますねえ…』

「ああ、俺が作ったからな……」

『レイさんが作ったんですか!?!』

「………まあな」

ここは高校……夏休み中なのだが、約束は約束なので補修授業を受けている。

タチコマがいるということとはつまりそういうことなのだが……まあ、掃除ロボが蔓延る学園都市でもタチコマは珍しい（まあ、そもそも俺が独自設計したモノなのでそもそ

も他に存在しないのだが……)らしく、それなりに注目を浴びている状況にある。

『レイさん』

「どうした」

『僕お邪魔だったんでしようか……?』

「いや……そういうわけではないが……」

そもそも何故こうなっているのかと言うとだ、元々この日は朝からタチコマと出かける予定(冒頭辺りで話した通り、対電仕様にするための部品を購入したりね)だったのだが、補習授業を受けることになってしまったので、それを話すとヘソを曲げてしまったと言うか拗ねたと言うか……

それでこうして一緒に高校に来た訳なのである……

「お待たせしました……あれ?」

「おう、センセイ……悪いが今日は同行者いるからよろしくな」

『ども〜』

「まあ……良いですけど……」

センセイが何故か不満そうな顔をしていたが……

気にするほどでもないかな。

『レイさん……レイさん？レイさあ〜ん？』

「ん？あ、ああ……」

「どうした」

『レイさん……お出掛け楽しくない？』

「あ、いや……そういうわけではないが……」

「まあ……気にする必要もないか………ん？」

『レイさん？』

「………タチコマ、悪い、用事ができた」

「いつか埋め合わせするから……」

「すまんっ」

『え!? れ、レイさん!?!』

『行っちゃった……』

『待って〜!!!』

タチコマは……ヤンデレになりきれていない微ヤンデレである……

これより登場するとある人物……彼に橘とのデート（デート？）を邪魔されたタチコマからどんな仕打ちが待っているのか……

少なくとも電気ショック程度では済まないだろう……

聖母の抱擁

「呼んだかな?」

「た、橘……」

「ん?友達かな?」

連絡を受けた俺は早速能力で寮へ(学園都市くらいの短い距離なら能力で跳んでいける)そして今到着し、五階のこの場所に着地した。

……さて、この状況を一言で説明するのは困難を極めるだろう。

しかしあえてそれをするのが俺クオリティー。

簡単に説明すると

教会の図書館は血まみれで倒れており、上条は金髪だが赤く染めた長めの髪の少年(背は高いが恐らく上条よりも年下だ)と、生きた炎の二人(匹?)と対峙していた。恐らくこの少年は教会からの回し者だろうが、生憎ソレは俺の獲物である。

「で、どこまでお話してたんだけ?」

「生憎だけど僕は彼女を回収しないといけないんだ……退いてくれないか?といったところまでかな?」

「ははあくん……それで上条がキレたと……あんまり怒ると体によくないぞ……」

まずこの炎は魔術によるものと見て間違いはない、上条を見るに能力は一度試したの
だろう……しかし消えていないとするとだ……ルーンを消してないんだなこれは……
そして察するにそのルーンは大量にあると見た。

なら、それを対処するまで……

「上条、よく聞け……」

「な、なんでせう？」

「この寮全体にある珍妙な模様の書かれた紙切れ、又はそれに準ずるモノを破壊しろ
……何、その模様の一部だけ消すだけで良い……」

「た、橘は？」

「アホが……俺があのアホ共をあしらつといてやるから問題を解決してこいって言うて
んだよ……美味しいとこ持ってけって事……」

「わ、わかった……」

「はよいけ……あんまり能力は見られたかねーんだ……」

人前で「あまり」能力は使ったことない……使ったとしても本当に一部なので俺の
能力は精々衝撃波を出す程度に思われているだろう。

ともかく色々と言得して上条にルーンを任せた俺はとりあえず教会の図書館に近寄

る少年を何とかすることにした。

「おっと、何しようとしてるのかな？」

「邪魔しないでくれないか？」

「それは無理だね……生憎だが教会の図書館は俺の獲物だ」

「なら力ずくで行かせてもらおうよ……イノケンティウス!!!」

人型の炎……魔女狩りの王……ね。

狩人の俺にそんな無粋な魔術はナンセンス……そう思わないかい？

「おっと……」

「な……何をして!？」

「ラ サント ヴィエルジュ ダンプラスマン（聖母の抱擁）……こんな老け顔の抱擁は

お嫌かな？」

聖母の抱擁……全てを包み、愛し、赦す抱擁……

「イノケンティウスの炎が……小さく……」

「炎の剣は止しといた方が良いと思うな……俺だつたらそうするね。じゃないと君は丸

焦げ……もしかしたら灰すら残らないかもね」

遂に炎が消えた……上条のやつ……なんとか間に合ったか……

「ホースであちこち派手に水ぶっかけちまったけど……はあ……不幸だ……」

「イノケンティウスが……まさか……クソッ」

こちららに向かってきた……ヤケクソか？

だがまあ……チエックメイトな。

「残念、今日の君はマジでアンラッキー……ついてないのさ本当に……」

先程の着地によって貯蓄された運動エネルギーを神父（神父だつてことはさつきわかつた）の腹に狙いを定めて解放する。

神父はそのまま寮の外へと派手に吹き飛んだ……ここ五階だぜ？うわ、痛そう……
「何はともあれ、事件解決の巻……それにしても弱かつたな……くすぐりおぼけのが手強かつたな」

おっと、そーいや教会の図書館はつと……うわこりや酷い……ザックリいつてるなこりや……

こりや……死ぬな。うん。

まあ……流石に現段階では監視対象である獲物に死なれるつても何か……なあ。

どれ、MOTTA IN AI 気もするが……生命エネルギー解放するか……上条、そして白いの（教会の ry は一々面倒なのでこう呼ぶことにした）この代償は高くつくぞ。

「この世に神はいるのか……多分、いるだろう……ま、多分だがな」

成程、生命エネルギーつてのは青いのか……ひとつ賢くなつたなおめでとう俺。

白いの、傷は消え去り、傷跡もなくなつた。

ついでにあちこちにあった痣やらなんやらも綺麗さっぱりなくなつた。

爪やら髪は伸びないらしい……伸びると思つたんだがな……。

軽くだが裂けてしまつてゐる部分、外側のみを修復しておくことにした……こう見えて裁縫は得意でね……。

「橘、インデックスは!？」

「ん、白いのなら俺の部屋で寝てるぞ……お前の部屋よか快適だからな……」

綺麗さっぱり治したといつても怪我人は怪我人……こんな夏のくそ暑い時にクー

ラーもない部屋に寝かせておける

かっつての……

……
とは流石に部屋の家電が全て（勿論クーラーも）壊れた上条が可哀想なので言わない

「そ、そうか……怪我は？」

「治してやった……感謝しろよ？」

「よ、よかった……」

「このツケは高いからな」

「え、!？」

「当たり前だろ……不治の病も治せるかもしれないなかったんだぞ？」

「そ、そうなのか……」

「そうだ……ま、部屋入れや……流石に暑い」

「お、おう……」

何か忘れてる気がしなくもないが……こういうのは大抵気のせいだ。うん。

「……………う……………ん？」

「……………起きたか」

「だ、誰!？」

「うっせ……………こちとら命の恩人だぞ」

しかも寢床を貸してやってるっていうね……………

「上条起きろ、てかお前まで寝てんじやねえ……………よっ」

「うげっ……………」

軽く頭を叩いたら奇声を上げて飛び起きた。

「あ、インデックス……大丈夫か!」

「はあ……まあ、ごゆつくり……飯はそこに作り置きしてあるからご自由にどうぞ……」
何とも言えない雰囲気には押しされ、外に出る事にした……

もう真夜中であつ俺の部屋な訳だし、納得いかないが……

「……………ん?」

何か光つた様な……

「気のせいか……」

にしてもタチコマどこをほつつき歩いてんだ……晩飯いらぬのかねえ……

「ん……電話?」

カノンの着メロ……まさか……ね

「はい……ゼロ タチバナ」

『もしもしもしもし? あ、ゼロくん?』

「……………ンだよドライ……てかお前生きてたのかよ……しつかり殺したと思ったのに

……………」

『んふふくん、アタシは殺せないよ?』

「ウゼエ、死ね……」

『無理♪君を追いかけて追いかけて……ンフツ♪』

「キメエ……胸の無駄な脂肪どうにかしてからおとといきやがれ死ね」

『えく……君の為に大きくしたのに……』

「知らねえ、死ね」

『えく？男の人って大きいのが良いんじゃないのく？』

「少なくとも俺は違え……死ね」

確かにそんな話を傭兵の同期としたような気もしたが俺は小さい方が良い……

『じゃ、君好みの女になっちゃ「うっせえ……次現れたら消炭にしてやる……」

正直この女は読めない。

名前はドライ（本名かどうかは知らんが……）俺と同年代……

ファーストコンタクトは傭兵時代……敵側として現れた。

その時はあっさりとしたつもりだったのだが……事あるごとに現れては俺に殺さ
れている。

言っていることが支離滅裂で、やることすることが理解できない。

そして、そしてだ……

なあ、わかるだろ？

「何より気味が悪い……」

「あ？なんだって？」

『ですから、今度の土日先生に付き合っしてほしいのです』

「なんでよ」

『先生の……友達のですね……』

「はつきり言ってもらえませんか？」

『友達の結婚式に付き合ってもらえませんか？』

「はい？」

『せ、先生は大人なんですけど……学園都市の外だと補導されてしまうのです……』

「それで？」

『ほ、保護者としてですね……』

「おいおい……免許証を提示するだけでも良いじゃねえか……」

「俺が同行するまでもないだろ？」

『提示してもそう簡単に信じてもらえないのですよ!!!』

「ああ……成程……なんか理解できる気もする……」

「とりあえずご愁傷さま……」

『いちいちそんな事で時間をとられてたら間に合わなくなっちゃうのです……』
「それで俺……か……」

「……………言外に俺がそれくらい老けて見えるとでも言いたいのかね己は」
『ち、違います!!先生に男友達がいなかったから……つてそうじゃなくて、付き合ってくるのですか?それとも予定が入ってるのですか?』

「いや、まあ……暇だけど……」

「土曜の……何時?」

『え?あ、えつと……午前十時に、いつもの喫茶店前で……』

「あ、おう……午前十時にいつもの喫茶店前な」

「服はそれっぽい服で良いよな?」

『大丈夫なのですよ』

その後話し合いは数十分続いたらしい……

橘はこの事案について小萌に別の企みがあることなど知りもしないだろう……
そもそも保護者的な役割なら女友達でも良いだろうに……

エンゲージ……結婚式場の飯は旨い

「橘ちゃん」

「おう」

午前十時……ではなく午前九時半……当然、待ち合わせ時間よりも早く集合場所へと向かうのは狩人として基本中の基本だ。

ちなみに俺はここに八時には来ていた。

タチコマ含め上条と白いのに部屋を任せておいた。

上条の部屋は怪我人を安静にしておくには些か不便すぎるからな……

「にしてもでさえポストンバックだな……何が入ってたんだ？」

「何って……着替えなのですよ……」

「着替えって……そんなにいるか？」

下手したらセンセイよりも大きいかもしれないポストンバック……正直そんなに着替えがいないとは思わないのだが……

「橘ちゃんこそ……荷物それだけですか？」

「俺はシヨルダーバッグひとつで移動できるのさ」

「便利ですぬ〜……先生には考えられないのです」

「はははっ、どっちかつつーとセンチにはポストンバックよりリュックサックのがお似合いだな」

てかランドセル……うわ、似合いすぎて気持ち悪っ……見た目はあれでも俺よりもずんげえ年喰つてつからなあ……

「むう……今バカにしましたね？」

「してねえ……さっさと行くぞ……ほれ貸せ」

「あ……私の……」

流石にちびなセンチに巨大なポストンバックを運ばせるのはどうかと思うからな……にしてもだ、

「静岡……だったか？」

大分遠いな……ま、その分飯には期待するがね。



これは宿泊用兼、式場でもあるホテルの一室での出来事である。

ここでは小萌、零の二人が泊まっているのだが……両者共に着替え中の様子。

「あれ……橘ちゃんまだ着替えてるんですかね……」

バスルームから出てきたのは小萌……零は未だ別室で着替えている。

女性である小萌よりも準備が長いとは……いったい全体どういふことなのか。

「うう……それにしても……」

「先生は悪い人なのです……」

さて、こうして小萌が頭を抱えているのもつい先日の話……



『私の結婚式……小萌も来てくれるわよね？』

「も、勿論なのですよ！」

『そう、良かった……』

『小萌も早く彼氏くらい作りなさいよ』

『あ、でも小萌には無理かなうなんて……』

『冗談よ』

「か、彼氏くらい……い、いるのですよ！」

『あらそうなの……意外ね』

「むう……き、紀美子の旦那さんよりも……」

「格好良くて、強くて、私の我が儘に付き合ってくれて、特別なのですよ!!!」

『そう……』

『ならその好きな人も連れてきなさいよ』

「ふえ!?!」

『勿論、その人がアナタの我が儘に付き合ってくれるなら……』

『何があっても連れてこれるわよね?』

「も、勿論! ギャフンと言わせてやりますよ!」

『期待してるわよ』



「何であんなこと言っちゃったんだろう……」

「うう……先生と生徒なのに……」

落ち込んでいるがまあ……見栄を張った結果である。こればかりは自業自得だと思ってしまう。

それはさておき、身悶えしている小萌を冷やかな目で見ている零がいるのだが……

放っておくべきなのか。

「ううううううううう！」

「何やってんだセンセイ……バカなのか？」

「きやうんつ……た、橘チャン？」

「準備は終わった……んです……か？」

「ふえ!？」

零のいる方向へ振り返った小萌は固まってしまった。

無理もない……髪、髭、e t c. を整えた零は最早誰だお前状態なのである。

「た、橘チャンその格好……」

ただのストリート迷彩柄着た老け顔がタキシード着たダンディなお兄様になった……以上。

「おう、まあ……センセイには世話なってるしな……」

「流石に恥をかかせるわけにもいかねえだろ？」

「一張羅とか引つ張り出してきた……文句あるか？」

気恥ずかしそうに苦笑いするその表情が素晴らしい程に様になっている。

「そ、そんな!？」

「え、えつと……何て言ったら良いのかその……」

「格好良い……本当に……」

「そうかい」

「そいつは良かった……」

端から見れば金持ちの親子なのだが……それは黙っておこう。